

かざ

ぐるま

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2025 秋号

110

公益財団法人 和歌山県文化財センター



東照宮石垣竣工全景

特集

名勝和歌の浦東照宮境内

石垣及び石階段の保存修理工事



東照宮石階段竣工全景

特集 名勝和歌の浦 東照宮境内 石垣及び石階段の保存修理工事

和歌の浦に建立された東照宮

紀州東照宮は、江戸幕府を開いた徳川家康を東照大権現として祀る東照社として、家康の第十子である初代紀州藩主徳川頼宣により、元和七年（1621）に創建されました。

駿府の国宝・久能山東照宮建立の指揮も行ったと伝えられる頼宣は、和歌山城から4kmほど南に位置し、万葉の時代から景勝地として知られる和歌の浦の、和歌浦湾に南面する権現山中腹に紀州藩の東照宮を築きました。また引き続き権現山の南東、和歌浦湾に浮かぶ小島・妹背山に石橋である三断橋を架け、護岸には石垣を廻し、頼宣の生母である養珠院が逝去した後には、山の中腹に多宝塔（海禅院多宝塔・和歌山市指定文化財）を建てるなど、和歌の浦の景観を整備していき



境内地へと続く石階段

ました。望楼である観海閣もあわせ庶民に広く開放した史実は現代の公園とも通じ、新たに転封してきた為政者として、和歌の浦に込めた想いが伝わってきます。

東照宮の石工事の特徴

石造の大きな鳥居を潜り、多くに元和の銘が刻まれた石灯籠が配された参道を矩折れに進むと、石造の橋を越えた先に108段の石階段がそびえます。東照宮の西に隣接する天満神社は野趣あふれる青石野面積みの石階段と赤く塗られた楼門のコントラストが印象的ですが、東照宮の石階段は砂岩の切石が整然と積み上げられています。石階段の足元側面を見ると、和歌山城の石垣にも確認出来る切り込み接ぎという技法も用いられていることが判ります。各石が極めて高い技術で加工されており、目地に隙間が出来ること無く幾何学的に積み上げられています。そして、石階段を登りながら両脇の石灯籠の足元を見ると、片岩の岩盤が露出し、波打つようにうねっています。この岩盤より低い位置に踏み石が据え

られていることから、石階段は権現山の岩盤を削り出した上に砂岩の切石を敷き並べる、と言う壮大な土木工事で築かれており、当時紀州藩が如何に高度な技術を駆使して東照宮を造営したかが判ります。

楼門を潜り境内に入ると、一段高く築かれた神域にも切り込み接ぎの石垣が奢られ、拝殿へと続く唐門の足元は、正方形に加工された石材が規則正しく敷き込まれています。東照宮建築の特徴でもある拝殿と本殿の間の石の間の土間とも共通の仕様となっており、東照宮全体で高い石工の技術を確認することが出来ます。

妹背山も同様で、中国の西湖堤に倣った三断橋のほか、護岸石積は打ち込み接ぎ、多宝塔の周囲の石柵も大きな石から削り出されているなど、様々な技法を確認することが出来ます。



石の間の石敷土間



妹背山の三断橋



石垣の破損状況

石垣と石階段の破損

令和五年十一月、境内の唐門と瑞垣みずがきを支える石垣と連続する東側の石垣中程で、数石の石材が崩落してしまいました。その周辺の石垣も大きく孕み出し、不安定な状況となっていることが確認されました。また東側に隣接する石階段も不陸が進み、通行に支障が出るような状況となっていたことから、名勝を構成する要素として国庫補助を受け、令和六年、令和七年の2か年度の事業として修復することになりました。



石階段の不陸状況

石垣と石階段の破損原因と修理

破損した石垣や石階段を分解したところ、周囲で成長した実生の樹木の根に押し出されたり、押し上げられたことが破損の原因であることが判りました。また、石垣の内側には基壇や礎石などの古材を用いた石積（4頁の短信に詳述）が施されていました。現状の石垣はその手前に厚さ20cmほどの薄い石が化粧として積まれ、石積が木の根に押し出されたことにより不安定な状態となっていることが判明しました。



石垣の積み直し状況

このため、石垣に近接する樹木の伐採と抜根を行って破損の原因を取り除き、古材の石積を不織布で保護した上で、高さや通りが適正になるように各石の納まりや角度を見極め、石垣の化粧石を分解前と同じ場所に積み直しました。

石階段も樹木の根の影響だけでなく、岩盤が露出して座りが悪くなっていたり、地盤面の沈下も確認出来たため、階段として安全に利用出来ることにも配慮して、各段の高さや段差が一定となるように積み直していき、往時の重厚な姿に復することが出来ました。

(多井 忠嗣)



東照宮で見つかった石垣 内側の謎の石積み

国指定名勝及び県指定史跡「和歌の浦」の一部である東照宮本殿の唐門・瑞垣を載せる石垣から東側に連続する石垣の一部が崩落したため、石垣解体修理が計画され、解体前及び解体中の発掘調査・立会調査が必要となりました。そこで、公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団が和歌山市の依頼を受けて発掘調査を実施することとなり、その発掘調査の一部を担当センターが支援しました。

石垣解体前に上面部分において幅2mの範囲で発掘調査を実施したところ、表土掘削後に黄褐色土の盛土が全面に確認でき、石垣構築時には石垣内側の上面は盛土であったことがわかりました。また、石垣は奥行が短く裏込めがないことが確認でき、石垣構築状況から大正時代の整備時に積まれたものである可能性が高いと判断されます。その後、石垣1段目解体後に2段目上面の高さまで掘り下げたところ、石垣の内側に切石を中心とした石材で積まれた石積みを確認できました。この石積みは、正面からみれば石垣状、上面からみれば敷石状に積まれています。石材の大きさも統一感がなく、小さい割石で構築され

る部分もあること、また、石垣南東部分では正面と側面の石垣に合わせた形で内側に石が積み上げられていることから、古い前身の石垣ではなく、正面の石垣と一体として石垣内側に構築されたと考えられます。ただし、加工された切石であることから、石垣構築時に東照宮の敷地にあった切石を石垣の内部構造材として再利用した可能性が考えられます。

調査範囲の西端部分の本殿を囲う瑞垣沿いには、切石ではなく丸石が多く認められ、黄褐色の盛土でなく黒褐色土の締まりのない土層が見られ、瑞垣に係る施工時

の埋土（掘方）である可能性があります。

当該地には『紀伊國名所圖會』に近代までに解体された三重塔及び前面の階段が描かれており、謎の石積みの下には三重塔に続く階段が埋まっているかもしれません。

（仲原 知之）



石垣3段目解体後 正面（南東から）



石垣1段目解体後 上面



石垣3段目解体後 正面

文化財建造物課 和歌山の建物とゆかりの人物(9)

明治時代の後期、日本各地を訪れたアメリカ人の哲学・心理学者ジョージ・トランブル・ラッド博士は、その体験を『Rare Days in Japan』（明治四十三年）という著書にまとめました。第11章には、広村（現在の有田郡広川町）での滞在の様子が記されています（以下、私訳による解釈です）。

この章を読んでみて、100年以上も前の外国人のまなざしに惹きつけられました。特に広村での描写からは、自然の美しさと人々のありのままの姿がラッド博士の心に深く響いていたことが伝わってきます。博士が広村を訪れた背景には、かつての教え子が広村の耐久社（耐久学舎）の舎長を務めていたという縁がありました。さらに博士は、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の短編小説『A Living God』にも深い関心を抱いていました。この物語は、安政南海地震の際に、津波から住民を救った濱口梧陵の実話をもとに描かれており、その舞台こそが広村だったのです。博士は、物語の背景となった土地と人々を自らの目で確かめたいと願い、広村を訪れることを決めたのでした。滞在中、住民には「広村を訪れた最初の外国人」として声を掛けられ、舎長からは、この訪問が地域全体の教育にとつてどれほどまでに意義深いかと熱心に語られました。博士自身も、広村の存在を国外に伝えることに強い関心を示しています。来校した際には「教師の理想」という題で講演も行われ、子どもたちからの歓迎ぶりや住民からのもてなしの様子が、文章から伝わってきます。広川町が誇る歴史の一端にふれることができたように感じています。

（大給 友樹）



耐久社の全景（広川町立耐久中学校内）
明治後期は図書閲覧室として使用。

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

埋蔵文化財課 こんな所に和歌山のゆかりの人物!!

社寺や道路脇あたりで石灯籠や石仏、石碑などの石造物を見かけることがあります。石造物は、歴史資料だけでなく、地域の風習を知る民俗資料として扱われるもの、美術工芸品や建造物として文化財指定されるものもあります。発掘調査で出土したり、城などの石垣に再利用されたりして考古資料として研究対象になることもあります。一方で、手に触れる距離で観察できる点においては最も身近な文化財ともいえるでしょう。石造物には年号や人物名が刻まれているものがあり、その文字を読みながら見て回れば歴史の一端に触れることができます。当センターでは令和四～六年度に高野町からの委託で町内の石造物調査を実施しました。その調査の折、「松下幸之助」と刻まれた石造物をいくつか見かけました（西禅院前の石灯籠、壇上伽藍三昧堂前の寄進標石、奥の院参道の石灯籠、奥の院バナソニツク企業墓所内の供養塔）。まさに、和歌山のゆかりの人物がこんな所に!!。松下幸之助といえば、松下電器産業株式会社（現パナソニック）の創業者で、出身地の和歌山市を中心に同氏から寄贈された施設が県内にたくさん残されています（風車第102号参照）。高野町内には度々宿泊した宿坊（西禅院）や寄贈された建物（金剛峯寺蟠龍庭内の茶室）があり、紹介した石造物とともに和歌山の偉人を訪ねる旅として高野山を訪れてみてはいかがでしょうか。（仲原 知之）



写真1 西禅院前



写真2 壇上伽藍三昧堂前



写真3 奥の院参道

文化財建造物課新現場紹介

重要文化財 濱口家住宅

はじめに

有田郡の南端に位置する広川町は、嘉永七年（1854）の南海地震の際、西濱口家出身の濱口梧陵が稲藁に火をつけて住民の避難を誘導し津波による被害から救った実話をもとにした物語「稲むらの火」が有名です。平成三十年（2018）には、「津浪祭」など広川町の防災文化にまつわるストーリー「百世の安堵」津波と復興の記憶が生きる広川の防災遺産」が日本遺産に認定されました。

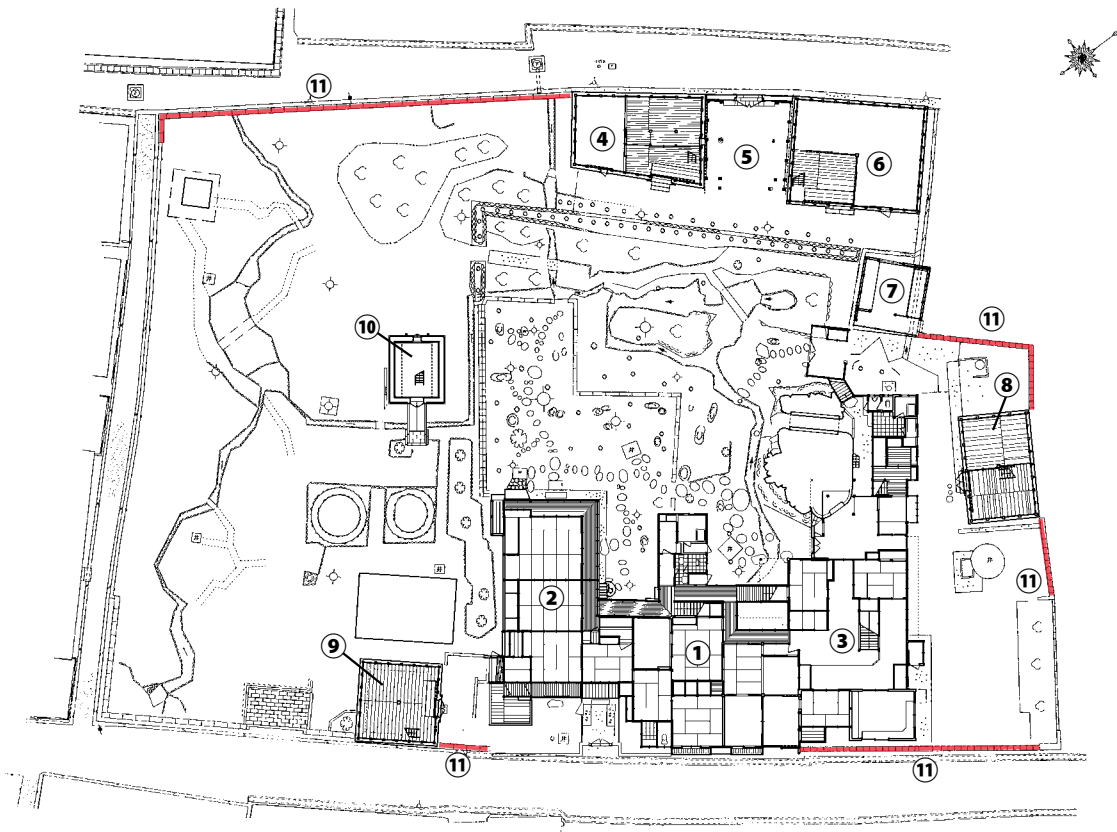
この日本遺産を構成する文化財の一つに、東濱口家の邸宅である濱口家住宅があります。広川町広の中心部を南北に通る中町通りの西側に位置する濱口家住宅は、平成二十六年に国の重要文化財として指定されました。一部赤煉瓦の外塀に囲われた屋敷地には10棟の建造物が建ち、中央には庭園を配します。今回は、濱口家住宅の中で主要な建造物である主屋・本座敷・御風楼と、今年度より開始した建造物保存修理事業の概要について紹介します。

主屋（写真2）

東濱口家は当初、西の浜（現在の耐久中学校付近）に住居を構えていましたが、宝永四年（1707）には南海地震による津波被害を受けました。その後、初代濱口吉右衛門によって現在の場所に移し、再建されたのが主屋です。北側一間半を土間、南側の床上部を田の字型に配する四間取りの平面構成とし、主に生活の場として使用されました。

本座敷（写真3）

本座敷は江戸時代後期、六代目濱口吉右衛門によって建立され、主に



- ①主屋
- ②本座敷
- ③御風楼
- ④南米蔵
- ⑤大工部屋
- ⑥北米蔵
- ⑦左官部屋
- ⑧新蔵
- ⑨文庫
- ⑩新文庫（附指定）
- ⑪煉瓦塀（附指定・計5基）

図1 濱口家住宅配置図

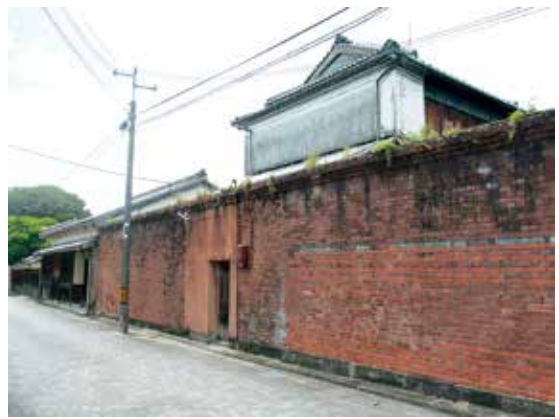


写真1 濱口家住宅全景（東より見る）
手前に煉瓦塀、左側に主屋、右側に御風楼が並び建つ。



写真2 主屋（東より見る）



写真3 本座敷（北西より見る）



写真4 御風楼（南西より見る）

冠婚葬祭や接客の場として使用されました。庭園を望む西面と北面には縁を配し、西から座敷・仏間・茶室が直列する平面構成としてあります。座敷には床・付書院・違棚・天袋を設け、屋久杉の竿縁天井や梅の四方柱目の柱など、細部にわたって上質な意匠が施されています。嘉永七年には津波による浸水被害を受けており、床柱には当時の津波の高さを示す傷が残されています。

御風楼 (写真4)

御風楼は明治時代末期、九代目濱口吉右衛門によって建立された木造三階建ての迎賓施設であり、一階は台所を配した給仕のための空間、二階・三階は座敷で構成されています。

二階は庭園とのつながりを意識し、縁より石組を伝って庭園に下りることが出来ます。三階は折上げ格天井をもつ八畳と六畳の二間続きの座敷で構成されています。広湾を望み雄大に広がるパノラマを意識し、東面に床・違棚・地袋を設け、北・西・南の三面は畳廊下と縁を設けた開放的な空間とし、縁の外周にガラス戸を建て込むほか、北西隅には昇降式の戸袋を設けます（風車第92号参照）。屋敷地における庭園と建物の一体化を意識した空間構成や、近代的な素材であるガラスの導入など、近代和風建築の特色を示しています。

建造物保存修理事業について

令和七年六月より、国庫補助事業として濱

口家住宅の建造物保存修理事業が始まりました。事業期間は令和十五年度末までの約10年間を予定しており、事業の前半は主屋・本座敷・御風楼を対象として、基礎・軸組の傾斜・不陸修正や構造補強等を含めた半解体修理、後半は屋敷地の土蔵群を対象として、屋根葺替を主とした修理を行います。今年度の冬には建物を覆う素屋根を建設し、本格的な修理事業が始まります。本誌においても定期的の特集を組み、工事の経過を紹介していきたいと考えています。文化財としての価値を損なうことなく、そして新たな価値を発見し後世に伝えていくことができるよう、今回の修理に臨む次第です。

（野田 達志）

催し物案内

和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2025 年 秋 ~ 2025 年 冬)

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 休館記念秋期特別展 遙かなる古墳時代の海へ ~紀伊半島と海をめぐる交流~
2025 年 10 月 4 日 (土) ~ 12 月 7 日 (日)
- 秋期特別展関連講演会
① 10 月 12 日 (日) ② 10 月 19 日 (日) ③ 11 月 2 日 (日)
④ 11 月 9 日 (日) ⑤ 11 月 16 日 (日) 13:30 ~ 16:30
- 秋期特別展展示解説
2025 年 11 月 30 日 (日) 13:30 ~ 15:30
- 風土記まつり
2025 年 10 月 26 日 (日) 10:00 ~ 15:30

和歌山県立博物館

- 特別展 紀伊徳川家の威風
2025 年 10 月 11 日 (土) ~ 11 月 24 日 (月・祝)

和歌山市立博物館

- 特別展 紀州の美を統べし殿様 徳川治宝
2025 年 10 月 25 日 (土) ~ 12 月 7 日 (日)

(公財)和歌山県文化財センター

- 和歌山県内文化財調査成果展 紀州のあゆみ 2025 【会場：御坊市歴史民俗資料館】
2025 年 10 月 11 日 (土) ~ 11 月 16 日 (日)
- 地宝のひびき —和歌山県内文化財調査報告会 2025— 【会場：御坊市歴史民俗資料館】
2025 年 11 月 8 日 (土) 13:00 ~ 16:50

※掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙
- 2 特集「名勝和歌の浦 東照宮境内石垣及び石階段の保存修理工事」
- 4 埋蔵文化財課 短信「東照宮で見つかった石垣内側の謎の石積み」
- 5 きのかに歴史小話「文化財建造物課 和歌山の建物とゆかりの人物 (9)」
「埋蔵文化財課 こんな所に和歌山のゆかりの人物 !!」
- 6 文化財建造物課 新現場紹介「重要文化財 濱口家住宅」
- 8 催し物案内

風車 110 (2025・秋号)

令和 7 年 9 月 30 日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp/>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】〒640-8301 和歌山市岩橋1263 番地の1
TEL 073-472-3710 FAX 073-474-2270
kanri-2@wabunse.or.jp



ホームページ



YouTube



WABUNSE_OFFICIAL
Instagram